

院長ノート



脳神経外科医
畑山 徹
(はたやま とおる)

1963年生まれ
青森で育ち、弘前大学を1988年に卒業
日立市の病院で河野拓司理事長に手術の
手ほどきを受け、東北各地で腕を磨いた
のち、2013年から当院に勤務
アメリカで三叉神経痛と顔面痙攣の治療
を学び、国内でも有数の実績を持つ
趣味は我流のピアノ
たまにライブハウスで演奏

病院のホームページに掲載している畑山院長のエッセイです。

月に1回くらい、脳外科診療や日常生活で感じている想いを軽妙なタッチで書き連ねています。

ご興味ありましたらQRコードから過去の内容もご覧下さい。

vol. 57



はた流コミュ術

第7条「聞こえやすくしゃべる」

還暦も過ぎ、手元の文字がかすみやすくなりました。

遠くならともかく、近くが見えにくくなるとは、若い頃には想像もしませんでした。

同じ年頃の方が大きな文字で印刷している様子を見ると、思わずホッとしてしまいます（笑）。

さらに、変化は目だけではなく耳にも現れています。

先日テレビで「若い人にはこの音が聞こえます」と言って流れた高周波の音が聞こえませんでした。

科学的に実証された方法のようでしたが、音量だけでなく、音程でも聞こえにくくなっている部分があると知りびっくりしました。

せっかく話しても、音によっては相手が聞き取れていないかもしれない。

そう考えると、声の出し方にも工夫が必要です。

聞こえやすい声は、相手によって違います。

耳が遠ければ大きな声、若い人には高音の声、心配そうな人には低音の声、大事な話にはゆっくりした声。

まだマスクを外せない病院においては、こちらの声がますます聞き取りにくくなっています。

わかる言葉を選ぶように、状況に合わせて聞こえやすい声を選ぶことも医療コミュ術には大事なことだと感じています。



院長ノートはこちらから→

<https://mito-bhc.com/blog/blog.html>

